

フィンランド人デザイナーのSeppo Kohoさんに聞く

Secto Designに見る、 プロダクトデザインの本質

フィンランドバーチ材のプライウッド（成型合板）を用いた
ランプコレクションを展開する照明メーカー「Secto Design（セクトデザイン）」。

Seppo Koho（セッポ・コホ）さんは、同社の全製品のデザインを手掛ける
フィンランド人プロダクトデザイナーであり、建築家としての顔も持つ。

彼のユニークなデザインは、デザイナー単独で完成されるものではなく、メーカーや工場との協働により輝き始める。

それは、フィンランドへ旅をすると至るところで目にする、

自然と建築、そして空間と家具、照明がシームレスに溶け合う光景のようだ。

取材・文／米津誠太郎



Seppo Kohoさん（写真提供／Seppo Koho）

プロダクトの販売や製造は
私が行うべき仕事ではない

— どのような経緯でプロダクトデザインを
手掛けるようになったのですか。

私はフィンランドの大学で、インテリアと家具
デザイン、そして建築を学びました。学生時代
には、将来の道を模索するため、いくつかの建
築設計事務所での研修生としての経験を積んで
います。その頃、プロダクトデザインに携わるチャ
ンスが自然と訪れました。

当時はジャーナリストで、後に「Secto Design」
を創業するTuula Jusélius（トゥーラ・ユセリ
ウス）さんが、家具製造のビジネスアイデアを
実現するためにデザイナーを探しており、大学
のリクルーティングサービスに募集広告を出し
ていたのです。それを見つけた私は、応募書類
を送付しました。休暇後に家へ戻ると返事が
届いていたので、すぐに連絡を取り、家具のデ
ザインやマテリアルに対する考え方などにつ
いて伝えました。その数日後には、いくつかの
ファーストスケッチを描き上げ、初めてのミー
ティングの場を設けています。私達は、実際に
顔を合わせて話し始めるや否や、今後のプロジェ
クトにおいて互いをよく理解し、二人の間に良
い関係が築けることを確認しました。こうして、
私は家具デザインを手掛けることになったの
です。

— いつ、ランプのデザインを手掛けるよう
になりましたか。

1990年代、ヘルシンキのプロダクトデザイナー
の多くは、イスなど家具のデザインを手掛けて
いました。しかし、徐々にランプのデザインがクロ
ーズアップされるようになり、私の興味も時代の



ヘルシンキの郊外にあるSecto Designのオフィス。緑に囲まれた別荘地のような場所に建つ（撮影／永井泰史）